オールト雲と長周期彗星

樋口有理可 東京工業大学

- 1. オールト雲の姿(想像)
- 2. 長周期彗星の分布の歴史(観測)
- 3. オールト雲の形成(理論)
- 4. オールト雲と長周期彗星の関係(観測+理論)



- ・長周期彗星の巣
 ・球(殻)状の構造
- ・~10⁵ AUまで広がる
- ・10¹²⁻¹³個の彗星
- ・誰も直接見られない
- ・長周期彗星の観測 から予測されたもの



e.g., Dones 2004





長周期彗星の分布 (2) ^{軌道傾斜角}

• 等方的 -Oort (1950)

Distribution of inclinations of cometary orbits.							
i 1/a	000010	•000 10 to •001 00	.001 to .004	•004 to •010	•010 to •020	•020 to •040	e = 1
0° – 60° 60 90 90 120 120 180	3 6 2 6	3 6 3 6	4 5 3 4	6 2 3 0	2 8 1 5	8 1 1 0	20 30 24 36

TABLE Q

• *i*~0 & 140 deg あたりに超過あり -e.g, T. Nakamura (1979)

・等方的

★短周期彗星由来の天体が混ざってる i~140度のピーク ←クロイツ族(分裂破片・元は1個?) 大半はSOHO(1995-)が発見



Catalogue of Cometary Orbits 2005 2081 comets

(only once observed ≅ not periodic)





カタログを加工する

新しいオールト雲由来彗星の分布 理論と比較できる、オールト雲からやってきた彗星の 分布を作るためには以下を取り除く必要がある:

• **短周期彗星由来天体** (1) <u>a<100, 500, 1000, 2000AU</u>などを省く

 ・分裂破片 (Kreutz & others)
 (2) 似た <u>i, ω, Ωを持つ天体はまとめて1個と数える</u> *if* (|i₁-i₂|<Δ && |ω₁-ω₂|<Δ && |Ω₁-Ω₂|<Δ), ⇒同一天体 <u>Δ=0.5, 1, 2, 5deg</u> (3) 近日点が小さい天体 <u>q<0.01, 0.02, 0.05, 0.1AU</u>

Catalogue of Cometary Orbits 2005

短周期彗星由来天体を除く

- a < 100AU $100AU \le a < 500AU$ • $500AU \le a < 1000AU$
- 1000AU≦a<2000AU a≧2000AU





Catalogue of Cometary Orbits 2005

分裂破片を除く

- $\Delta < 0.5 deg$ 0.5 deg $\leq \Delta < 1 deg$
- $1 \text{deg} \leq \Delta < 2 \text{deg}$
- $2\text{deg} \leq \Delta < 5\text{deg}$ $\Delta \geq 5\text{deg}$





Catalogue of Cometary Orbits 2005

Sun-grazing cometsを除く

- q<0.01AU 0.01AU \leq q<0.02AU • 0.02AU \leq q<0.05AU
- $0.05AU \leq q < 0.1AU$ $q \geq 0.1AU$





新しい軌道傾斜角分布





<mark>外力による軌道進化(概要)</mark> The Galactic tide (GT)

動径方向成分を無視することで、銀河ポテンシャルのもとでは彗星のエネルギーΦ、角運動量のz成分hは保存する。

$$\Phi = -\frac{GM_{\text{Sun}}}{2a} + \left\langle 2\pi G\rho_0 z^2 \right\rangle = \text{const.}$$

$$h_z = \sqrt{GM_{\text{Sun}}(1 - e^2)} \cos i_{\text{galactic}} = \text{const.}$$

Heisler & Tremaine (1986)

- G gravitational constant total density in the solar ho_0 neighborhood
 - z distance from galactic plane

```
M_{Sun} solar mass i_{galactic} inclination f
```

inclination to the galactic plane

⇒ a は変化しない, ^{/galactic} その他の軌道要素は周期的な変化をする (**計算で使った値:** ρ₀=0.1 M_{Sun}, i_{ecliptic}=63 deg).

Higuchi+ (2007)

Passing Stars (PS)

・ 全軌道要素をrandomize vs. 彗星の個数を減らす(星間空間に放出)
 ⇒ 軌道要素が等方的分布になる頃には, 彗星はほとんど残っていない

(計算方法: 衝擊近似).

銀河潮汐力(1)

- *ここで考える銀河系
 - ・銀河の質量分布は一様
 - ・z方向の成分のみ考慮
 ・黄道面傾斜角=63度



* 微惑星の運動方程式



G:万有引力定数 M_{Sun}:中心星質量 r:中心星に対する位 ρ₀置 z:銀河密度 :z方向の距離の差

銀河潮汐力(2) 軌道進化の例(数値計算)



銀河潮汐力(3-1) 軌道要素の進化の解析解

- * 微惑星のエネルギー $\Phi = -\frac{GM_{Sun}}{2a} + 2\pi G\rho_0 z^2 = \text{const.}$
 - 摂動関数を軌道要素であらわし、1ケプラー周期で平均する と、〈摂動関数〉 = $\pi G \rho_0 a^2 \sin^2 i_{iijmm} (1 - e^2 + 5e^2 \sin^2 \omega) = R$ Heisler & Tremaine (1986)

Rをラグランジュの惑星方程式に代入して以下を得る。 $\frac{da}{dt} = \frac{2}{na} \frac{\partial R}{\partial \varepsilon} = 0 \rightarrow a$ は時間変化しない $\frac{de}{dt} = -20\pi G \rho_0 a^{3/2} (1-e^2)^{1/2} e^2 \sin^2 i_{i_{(47)}} \sin \omega \cos \omega$ $\frac{d\Omega}{dt} = 2\pi G \rho_0 a^{3/2} \frac{\cos i_{i_{(47)}}}{\sqrt{1-e^2}} (1-e^2+5e^2\sin^2 \omega)$ 銀河潮汐力(3-2) 軌道要素の進化の解析解 de/dt を積分すると $e^2 = e_{\min}^2 + (e_{\max}^2 - e_{\min}^2) cn^2(\theta, k^2)$ cn:ヤコビ楕円積 $\theta = \theta(a, \rho_0, c, L_7, t)$ $k = k(c, L_7)$ Matese & Whitman (1989), Kinoshita & Nakai (1999,2007) 分 * 微惑星の2個の保存量 エネルギ $C = \sin^2 i_{\text{銀河面}} \left(1 - \frac{e^2}{2} + 5\frac{e^2}{2} \sin^2 \omega\right) = \text{const.}$ 角運動量のz成分 $L_z = (1-e^2)^{\frac{1}{2}} \cos \frac{i_{3}}{i_{3}} = \text{const.}$ e がわかれば i _{銀河面}もωもわか $d\Omega/dt$ を積分すると $\Omega = \Omega_{initial} - A\Pi(\theta, \alpha^2)$ Π:第3種一般楕円積分 $A = A(a, \rho_0, c, L_z)$ $\alpha = \alpha(c, L_z)$ Breiter & Ratajczak (2005)

銀河潮汐力によるオールト雲形成 (a_{initial}=20 000AU)



- ・似た周期での似た軌道進化
- 等方的にはならない

















- 軌道傾斜角はすぐに初期値を忘れる
- ・ 平坦な分布を経て等方に近づく
- ・この例では50億年でおよそ半減

両外カによる軌道進化例











軌道進化に考慮した外力 恒星 (ランダム) 銀河潮汐力 (a 以外周期的) 両方 (中間的)



知りたいこと (1)オールト雲彗星の軌道傾斜角分布 (2)オールト雲由来の長周期彗星の軌道傾斜角分布 (3)(1)と(2)の関係

恒星遭遇によるnew cometの傾斜角分布(1)



(1)と(2)に強い相関は見られない

1回の恒星遭遇による *i,q*の変化

a=20,000AU, q=100AU, i=0 の彗星が遠日点で Δv(=20m/s) の速度変 化を角度α&β方向に受けた場合の近日点距離と傾斜角の変化

new cometのとりうる傾斜角の範囲は0-180度でほぼ一様分布
・ new cometは元の傾斜角を忘れて内側にやってくる

・1回の恒星遭遇で作られたnew comet shower の傾斜角分布は一様

銀河潮汐力によるnew cometの傾斜角分布

(1) と(2) に強い相関は見られない

(1)と(2)に強い相関は見られない

銀河潮汐力によるnew cometの傾斜角分布

理論と観測の比較

理論からは、new cometsの傾斜角分布は以下のようになる。

GTとPSによるnew cometの傾斜角分布 (1)

GTとPSによるnew cometの傾斜角分布 (2) a_{initial} による違い (50億年後)

軌道傾斜角より、軌道の向き(遠日点の銀経・銀緯)をみるべきか?

GT&PSによるオールト雲の銀経・銀緯分布

遠日点の銀経・銀緯分布(1) catalogue 2005

遠日点の銀経・銀緯分布(2) catalogue 2005

まとめ

- Catalogue of Cometary Orbits 2005からのオールト雲彗星を 取り出し
- ・外力によるオールト雲形成の計算:
 - 銀河潮汐力: 解析解
 - 恒星遭遇: 衝擊近似
- ・長周期彗星の軌道傾斜角分布の予想と観測の比較
- 長周期彗星の傾斜角分布はオールト雲のそれを必ずしも反映しない
 - 1回の恒星遭遇によるinjection -> 平らな傾斜角分布 銀河潮汐力によるinjection -> 0-140deg
- ●~0と~140度付近の超過と、90度付近の不足は理論予測と調和的
- ⇒ 長周期彗星の軌道傾斜角分布は等方的ではない

観測の銀経分布からは、まだ円盤に近いオールト雲が予測される